

鳥の劇場×シアター・ブレイキング・スルー・バリアーズ (TBTB) (米国)
『バックさんの魔法／美のことなり』第3回報告書
〈成果発表・まとめ〉
森田かずよ

本稿では、成果発表について報告すると共に、本プロジェクト全体の総括を述べたい。

成果発表は2022年9月24日・25日の両日行われた。演目としては『美のことなり1』『バックさんの魔法』『美のことなり2』『エピローグ』の流れで上演された。『美のことなり1、2』ともモノローグが繋がる会話劇である中、コメディ要素がある『バックさんの魔法』が間に入るによりテンポよく進み、観客を引き込んだ。

『エピローグ』は、『美のことなり』の出演者8名全員が自分自身に起こった心の変化を表す。それまでそれぞれ個人のエピソードに目が行きがちだったところから、暖かい風が吹くように輪が生まれる。8名がお互いの顔を見ながら、言葉を越えて心を通わせる様子が見える。この作品全体としてのメッセージ性が強く込められている。

『バックさんの魔法』は、一度オンラインで創作された作品を劇場で上演した。シェイクスピアの『真夏の夜の夢』をアメリカの俳優、日本の俳優で上演しようとする中で、稽古場で起きる愛のすれ違いを描いたものである。舞台左側をアメリカ、右側を日本として照明で区切り、プロデューサー役の俳優（齊藤頼陽氏）が中心にしながら、縦横無尽にふたつの世界を渡り歩く。元々Zoomを使って制作したことから、プロデューサーの顔をカメラを通して背景に投影し、オンラインでの画面であることを強調する演出となっている。ふたつの国でのやりとりをユーモラスに表現した内容だが、特に間を繋ぐ齋藤氏の表情や動きがコミカルで、観客の笑いを誘った。途中『バックさんの魔法』に出演していない俳優が、効果音として楽器を演奏するシーンがあり、演目を越えて、よりひとつの集団としての一体感を醸し出していた。

今回は新作である『美のことなり』の上演の様子について、より詳しく述べたい。

『美のことなり』は、8名の俳優が舞台上に立ち「あなたが美しいと思うものはなんですか」「私があなたを美しいと言ったら、あなたはどう思いますか」といった質問を投げかけられるところから始まる。その後4名の俳優が舞台上に残り、『美のことなり1』が始まる。背景にはシアター・ブレイキング・スルー・バリアーズ (TBTB) の俳優が話す台詞に日本語訳、じゆう劇場の俳優が話す台詞に英語訳の字幕が流れる。

『美のことなり』では「あなたは美しいです」と声をかけられたことへの戸惑いから、自身の考えについて述べていく。「美しい」という言葉から何を連想するのか。そこから自身の容姿、家族、過去の出来事など、エピソードの重なりによって紡ぎ出される。4名のモノローグが独立しつつも、時折不思議に交差し、そこに空間が生まれた。お互い言葉の繋がりを受けることによって起きる心の変化を描いている。脚本家が俳優にインタビューを行いながら創られたこの脚本は、時に詩的な言語を用いて語られた。日本人の俳優の語る言葉は、翻訳を通して、アメリカ人の脚本家によって膨らませられ台詞となった。ここでそれぞれが語るエピソードは決して障がいの要素だけを扱っているわけではなく、容姿を含めた障がいの受容や、ひとりの成熟した人間として見られたいといった想いなども要素として加わっていく。その内容は、置かれた環境やコミュニティが違

いながらも、普遍的な問題も多くあった。

言語や生活環境が違うこと、TBTB側は身体に障がいのある俳優、じゆう劇場側は精神や知的能力に障がいのある俳優がいたこと、このモノローグが交差する形態の上演は、両国の俳優にとって非常にハードルの高いものであったとうかがえる。特に稽古終盤の数日は、完成度や密度を上げることに力が注がれたが、急な変化やスピードに対応することが難しい俳優もあり、体力的なことも考慮され、本番初日に予定されていたトークイベント「じゆうTBTBコラボの三年の軌跡」が中止となり、最終リハーサルにあてられた。(2日目は開催)

私が鑑賞したのは初日である。本番の中でひとつ、印象的な光景があった。『美のことなり2』で出演者の石井優美氏は、台詞がわからなくなったのか、言葉が止まってしまうことがあった。その間、静寂が流れる。客席にも緊張が走る。彼女は何度も前の台詞を反復し、身体の中にある言葉を探し、やっと出てきた台詞を繋ぎとめるように話し続けた。そんなことが私の見た公演中2、3度あった。明らかに彼女は混乱しているように見えた。演出家の中島諒人氏によると、彼女は中学生の頃、一度記憶を失ったことによる認知的な障がいがある。その様子は稽古中にも何度も見た姿だったこともあり、あくまで私の想像の域を越えないが、もしかしたら日常生活でも彼女はこんな状況に遭遇することがあるのかもしれない。私はこの時間を共有できたことで、彼女の日常生活を垣間見たような気がした。また、石井氏だけでなく、俳優それぞれに役柄を越えた身体がくっきりと現れる時間があった。

私はこの光景を見て「俳優に求められる能力とは何なのか」といった問いを得た。俳優としては、よどみなく台詞を話すことを理想とし、強さや確実性を求めがちである。しかし、本当にそれだけだろうか。もちろんそれは、たどたどしく台詞を言うことが正しいというわけではない。決して障がいにフォーカスしたいわけではない。障がい特性に囚われてしまうことは危険性を孕む。障がい者である前にひとりの俳優としてそこに存在している。しかし、舞台上で身体的、精神的状況に真摯に立ち向かう彼女の演じる姿から「演じること」について新しい価値基準を得たように、大きく心を揺さぶられた。規範の価値観のみで判断してしまうと、取り逃がしてしまう豊かさのようなものがあるのではないか。

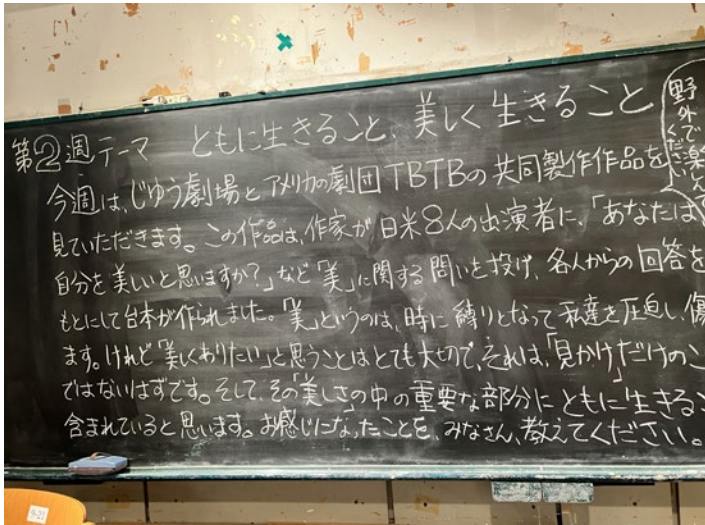
またこのコラボ公演では、「演劇の可能性」について考える示唆も得た。稽古中の雑談の中で、TBTBの演出家であるニコラス・ヴィセリ氏が「車椅子の俳優がマクベスを演じることに何の問題があるのか」と言ったことに私は少し衝撃を受けた。確かにTBTB、じゆう劇場でも過去にシェイクスピアを何度か上演しているが、そのような冒険をする劇団は特に日本では数少ない。ここでヴィセリ氏の言いたかったことは、演劇の可能性ではないかと私は考える。演劇は現実をそのまま再現するわけではない。演出や俳優の想像力や表現方法によって、身体の特性にかかわらず、リアルなキャラクターを創り出すことができる。例えば車椅子で存在することにより、その場の状況をよりリアルに表現し、観客が想像力を膨らませることができる。「車椅子であろうとなかろうと」といった言葉だけでなく、また「障がいがあるのに」のような限定的かつ憐憫のような言葉ではなく、車椅子であることがプラスとして働き全く新しい表現を生み出すこと、そこに果敢に取り組んでいる。

残念ながらもまだ日本では、そのような視点に立ち、実施する公演は多くない。観客としても、車椅子の俳優が舞台上で演じる姿を見る経験はまだ数少ない。その理由としては、まだ障がいのある俳優を含む、多様な

俳優育成に目が届かないことがあげられる。

日本においては、俳優という職業の区別自体が、障がいがある／ないにかかわらず曖昧である。ヴィセリ氏によると、アメリカでも曖昧な部分もあるが、俳優組合に登録ができるかどうか、ひとつの指針となるようだ。ハードルは高いそうだが、登録されると、俳優としてギャランティーのある仕事をもらえる。加えてTBTBにおいては、経験が少ない俳優希望者にはトレーニングの機会を設け、育成し見極める。また俳優だけではなく、障がい者に特化して脚本家や演出家を育てる機会を設けようとする動きもある。私自身、障がいのある俳優のひとりとして、これから日本で障がいのある人を含む多様な人の演劇活動がより活発になっていくことを願ってやまない。

TBTBはこの滞在中、Vlog (Video Blog) として何度か映像をSNSに公開した。そこでは、じゆう劇場、TBTBの両俳優陣が音楽を通じて交流する様子が見られた。このコラボ公演の間、言語の違いが立ちはだかってはいたが、楽器を弾くことや歌を歌うことなどから始まり、稽古の時間を重ねていくことで、お互い言葉にできること、できないことも含めて距離を縮めていった。



じゆう劇場の俳優である井谷優太氏も公演を終えて「言語以外のところで繋がったような感覚。相手が言わんとしていることを言葉以外の部分も含めて感じ取る力。その力と、実際に触れ合う中で生まれるコミュニケーションの大切さを今回のプロジェクトを通し、体感的に学ぶことができた」と話している。このプロジェクト全体を体現する台詞が『エピソード』の中にある。

どんなに見た目が違って、心の中でそれを考える

それを思う

それを感じる

それを知っている

私たちは全て同じ

人間は同じことを望み、求めるから

違う体を持つ私たちがそれぞれ必要とすることは、全然違うかもしれないけれど

言葉、考え、文化に関係なく

私たちはみんな愛を求める

(中略)

私たちは私たちが持っている特別な何かを、他の誰かの中に見つける

それは言葉で理解できるものだったり

音楽を通して感じるものだったり

体で感じるものだったり

心で感じるものだったりする

私たちが一人一人どう違って、私たちをつなげるのは愛

この言葉で公演は締めくくられる。

今回のコラボ公演は、2014年からじゆう劇場とTBTBが地道に交流を重ねてきた結果、実現したものである。パンデミックで人の往来が制限される中、昨年のオンライン創作を経て『パックさんの魔法』が生まれた。また、俳優の内面を見せ合いながら紡がれる『美のことなり』のような演劇はお互いの信頼関係がないと生まれない。この創作に踏み切り、上演に至ったことは評価に値する。ふたつの劇団が国籍や、言語、身体の違いを認め合いながら愛で繋がり合い、困難を乗り越えられた結実である。このような国際的な取り組み、特に障がいのある人を含む劇団での事例は、まだまだ数が少ない。さらなる取組の推進を期待したい。

